

## 第1回 全国都市緑化かわさきフェア基本構想懇談会

### 委員意見一覧

#### ◇川崎の魅力・地域力の促進について

##### 倉島委員

- ・もしグリーンを使って変えるきっかけとなるフェアになるのであれば、「川崎の魅力や地域力の促進」にフォーカスし、都市化の代わりに犠牲にしてきた何かを次の100年で取り返すきっかけとなるようなフェアと、コンセプト付けたほうが、特に若い市民には刺さるのではないかと。

##### 鈴木委員

- ・いくつかの時代が川崎にもあり、横浜と東京に挟まれた非常に寂しい土地、という表現をされてきた時代があった。最近は変わってきており、横浜と東京の中心にあるのが川崎だということが言われている。

##### 萩原委員

- ・川崎の歴史をきちんと捉えることが必要で、川崎が細長く二ヶ領用水を核として栄え、それが工業の基礎になり、武蔵小杉でいえば、工場の移転後に高層マンションができていますので、人間の幸せの問題として、自然の一部であって緑と共に共生していかないと、この先も持続可能な社会をつくるためには必要だ。

##### 和城委員

- ・これまでの川崎の歴史は、どちらかというと緑の面からいくと結構悪いところが多い。南から北まで自然を削って新しくできたものが、今度はどうやって自然をつくり直して共存していくというところにテーマができれば本当に川崎らしいものになる。

#### ◇地域コミュニティの促進について

##### 池田委員

- ・都会に住んでいると、人のつながりを感じにくくなっており、便利さをお金で買う代わりに、つながりを省いており、それを地域にある農や自然、緑化することにより、多世代交流や、普段つながらない人とつながり、助け合う文化が生まれ、コミュニティを創出することができるのが農の力で、その中で川崎市に住む人たちの幸福度が上がるなど、結果的に様々な問題の解決につながる。

#### ◇子どもたちへの教育の場の提供について

##### 佐藤委員

- ・子どもたちにどういう「みどり」にするかがポイントで、その「みどり」が実際にどういうものなのか、つなげるコンセプトをどう考えるかというところが、子どもたちに考えさせるときに一般的な「みどり」ではなく、多様な人同士がつながる仕掛けが「みどり」という言葉にうまく変わればよい。
- ・子どもたちは、昔のことを知らない。昔の川崎を知った上で未来を考える、川崎はこんな苦勞をして今のまちをつくったということを、教育課程でどこの学校でもやれるとよい。

#### ◇都市環境の整備について

#### 佐土原委員

- ・これからのインフラとしての「グリーンインフラ」の在り方というものが、市民に訴えられるということが重要で、出発点として考えていくことは大事かと思う。
- ・川崎市が「みどり」の視点から見たときに四つのエリアに分けて捉えることができるというのは、わかりやすく、それぞれの地域のこれからの在り方ということを具体的に示すことができれば、地元的生活感の中から捉えていくということにつながるのではないか。

#### ◇新たな緑化フェアのとりくみに向けて

#### 渡辺委員

- ・私が過去、巡回系事業等の仕事してきた中で、毎回やっているとマンネリズムになり、各自治体のオリジナリティという問題が全般にあり、川崎はそれをチャレンジするので、これはいい。
- ・川崎の多様性は、どの分野で、何を持っているのかが分かりにくいので具現化をしなければならない。
- ・「みどり」はキーワードで、何かの掛け合わせで価値を作っていく。構造観をどれだけ川崎が変えられるのか、是非チャレンジしてほしいし、やらなければならない。
- ・何を残したいのかというのは早めに決め、明確にし、市民に意見を求め、こんなレガシーを残したいから、ここで何をするというものをバックキャスト的に示さないと従来型になる。

#### 反町委員

- ・フェアは毎年、全国で行われており、この時期に川崎だから川崎ならではのやり方で、その後につながっていく仕組み、きっかけをつくっていくのが重要だろう。PRの仕方、フェアの前後も、インターネットとかSNS、こういうジャンルに特化した人気のある You Tuber の方も絡めて大きなPR効果と、持続的な興味や関心を高めていく仕組みが必要だ。

#### 野村調整官

- ・川崎市の今後を、フェアをきっかけにしたいというところは、マンネリ化した都市緑化フェアを改善していく上でもいい取り組み。多様性という言葉キーワードにしていくことは、今までの説明の中でいいとは思いますが、それを「みどり」とつなぐということがポイントになる。川崎市の多様性を市民が十分に分かって強みだと思ってもらえないところがあるので、そういうところを「みどり」でつないでいくような形のフェアになればいい。
- ・フェアの結果として、プログラム、取り組み、市民関わった取り組みというのを50個、100個やりましたということを目標にしてくというような考え方もある。

◇全体を通して（社会の変容を踏まえた今後のまちづくり、新たなライフスタイルに向けた意見）

佐土原委員

- ・最近、コロナの感染、ICT、働き方の変革、在宅勤務というところで、身近な生活環境がより重要になり、屋外環境というのが、より見直されてきているということを考えると、身近な「みどり」の環境を見直し、その価値をより高めていくような視点が今の状況の中でますます重要になってくると思うので、その視点も踏まえて考えていければいい。
- ・大都市は、多くの人を集め、賑わいをつくるということを一生懸命やり、新たな価値を生み出すことをやろうとしてきたわけだが、集まることのリスクとのバランスを取りながらこれからのまちづくりはやらなければいけないという状況を考えると、屋内は密になると、人の交流の場としてはふさわしくない場面も多くなっている。
- ・感染症の分野の方といろいろ議論している中で、屋外は危険が低いということがあり、そういう場を交流の場、あるいは仕事の場にしてみてもというような動きも出てきている。
- ・リスクが低くて、人のつながりを保てる空間としても大事になってくることを考えると、これまでも身近な公園や緑道を造ったりしてきているが、さらに質を高めていくことも期待され、人の交流が生まれるような「みどり」の空間というのをどうすればいいのか、ということ、具体的に考えて提案していくということができれば、これからのまちづくりにつながっていく。

今井委員

- ・今回のフェアのコンセプト、今後に向けて都市における新たな「みどり」の価値の創造という点では、非常に共感している。今後の「みどり」の価値の創造という点であれば、会場以外でも「まちなか、まちかど」にもこういう緑のスポットを設け、残していった方が、フェアが終わった後も市民の皆さんに「みどり」を印象づける手になる。

涌井委員

- ・川崎は、他の市町に比べ、土地利用、文化的な特性も多様性に富んでおり、多様性と寛容性、そういう特性を生かしていきたいというのが一つ。なおかつ、それを「みどり」というバインディングの役割をする媒体で、より融合度を強め、その中に隠されている矛盾をできる限り解決していこうというふうに思う。
- ・問題は、①「これを会場にどう具体的に可視化していくのか」、②「市民の方たちがその思いをどれだけ実感してこのフェアを考えられるか」、③「市制100年という一つの共通のメモリアルなことに対し、市民が一体となってこの問題について、こういう課題を解決していけば、もっと住みやすいまちになるという理解を深めていくための仕掛けをどうしていくのか」、ということに掛かっている。
- ・これから我々が何を考えなければならないかというのは、ウィズコロナとアフターコロナを区分して考えていく必要がある。来年辺りまでは、我々はコロナとどう共生するのかという様々な知恵を巡らせながら戦っていくと思うが、その後の世界というのは、我々が今、想像しているものと全く違う世界が来る可能性がある。
- ・過去、文明の転換点は、感染症の大流行が転換点になっている。そういうことから、今、我々は行動変容を強いられているが、この変容が定着した方向になり、これが産業、あるいはライフスタイルに対して大きな影響を与え、社会的大変容を起こす可能性が高い。
- ・今までのまちは、工業化の推進のために最も合理的な都市計画があればいいという考えで、これか

らは、近隣を重視し、集合体の都市がどうなのだという方向に変わっていく可能性が非常に強い。

- 自分たちの環境は自分たちで創造していくという意識がなければ、これからの社会は多分成り立たない。そうしていくことで、遠くへ行って旅するのではなくて、今まで自分の身の回りにあって気が付かなかったことに気づき、それを深めて理解し、近隣に対して目を向けていくということが大事である。
- なぜ川崎がそのモデルになり得るのかというのは、様々な地勢、文化、人種といったような、様々な多様性を上手に融和してきた。これが「みどり」が上手に媒介になって、化学反応がどんどん起きていくと、非常に面白いことになっていくとことが、実は新しい産業の創出のインキュベーションになるかもしれないので、しっかり考えていく必要がある。
- これ以上の地球環境の悪化は、自然災害を激甚化する一方になるので、これを今までの構築物だけではとても解決できず、ピークカットという方法を取るためには、多重防御の考え方を持たなければいけない。
- 「みどり」というのは、人と人との違いなり、文化と文化の違いみたいなものに化学反応を起こして別なものにしていくという効果があるかもしれない。そういう広範な考え方で「みどり」というものを捉えていく必要があるのではないか。自然をどう利活用したら楽しいということを身に付け、都市緑化フェアで実現できるとしたら、非常に意味がある。
- 川崎市がどういう層序で積層し、二ヶ領用水に開削され農地ができ、農地が平坦で、広がっているので工業化しやすく、やがて海は遠浅で埋め立て工業都市に変わり、そのすぐ近くに人が住むまちができるという積み重ねがあるので、地域の構造を、地域の方々が理解するきっかけにこの緑化フェアというものができてくると、実は緑の価値が2倍にも、3倍に大きく見えるのではないかと思う。